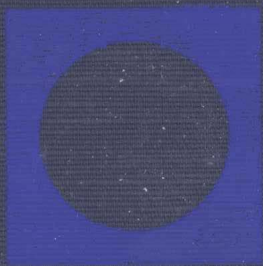


未完反語派



長部

目



長部日出雄

未完反語派

未完反語派

長部日出雄

福武書店



長部日出雄（おさべ・ひでを）

一九三四年、青森県弘前市に生まれる。早稻田大学文学部中退。「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」が第六九回直木賞を、「鬼が来た 棟方志功伝」が七九年芸術選奨を受賞する。その他の著書として「津軽から飛んだ」「消えた城塞」「風雪平野」「禁酒安兵衛」「源義経」「神話世界の太宰治」などがある。

未完反語派

一九八二年二月一〇日 第一刷印刷
一九八二年二月一五日 第一刷発行

定価一六〇〇円

著者

長部日出雄

発行者

福武哲彦

発行所

株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南四一八一
〒103 電話〇三二二二〇一・二二二一
振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

未完反語派

白みかけた空に、数羽の鳥が羽根を動かして放つ含嗽のやうな声がした。薄暗い雪上を行く新八の睡氣が覺めた。

春が近づいてゐるとは信じられない寒さだつた。夜のあひだ蒼白い光を秘めてゐた雪面は、明け方にかへつて輝きを失つた。灰の色になつた。

晩冬の狼狽であつた。前方は一面に灰の色の広がりになかなか見えない。じつは沼や小川の多い土地だつた。長い冬季に凍結した上に積つて、いまは嵩を減じつつある雪の面を、昨日降つた雨が、夜來の寒さで凍らせてゐた。踏み込む足は僅かしか沈まなかつたが、空に鳥の声を聞き、足元に微かなきしみを覺えながら、薄氷を踏む思ひで進んで行つた。

人の氣配を感じたとみえる。行手の雪原に置かれた馬の屍体に群つてゐた狼が、口口に咆哮を始めた。薄氷を踏む思ひが消えた。全身の血の騒ぎと武者震ひがそれにかはつた。空に赤みが生じ、間もなく黄金の日の光がさした。灰より白に近くなつた雪原は、新しい色彩を帯びた。遠い

狼の毛並が朝日に輝いた。あちこちの林や、丘のかげから姿を現はした人人は、次第に円陣を形づくつて、輪を縮めた。吠えてゐた狼は、馬の屍体を離れ、諸方に疾走した。人は輪の間隙を狙つて来る狼に、威嚇の声を発して、短い獵槍を突き出した。狼は齒を剥いて襲ひかかる氣勢を示しながらも、多くは身を転じて別の方向に逸走した。円陣の中を逃げ惑つてゐるうちに、勢ひを失つて咆哮が力のない悲鳴にかはる狼がふえた。抵抗の氣力を捨てぬ狼もゐた。獵師は威嚇を繰り返しつつ、徐徐に輪を縮め、狼が疲れるのを待ち、呼び寄せるための餌にした馬の屍体の回りに追ひつめて、毛皮に無駄な傷をつけぬやう生捕にするのであつたが、この日は獵師のなかに数人の武士がまじつてゐた。腰を低く落とした構へから、逃亡を諦めず時に反撃に転じて襲ひかかつてくる獯猛な狼に、氣合とともに短槍を繰り出した。

なかでも斎藤安兵衛門下で随一といはれる喜多村金吾の氣合の烈しさと、槍の鋭さが目立つた。最後まで抵抗を続けた狼をしとめた金吾と、新八の視線が合つた。金吾の顔に光つてゐたのは、悪戯つ子の目であつた。

山鹿素行の血をひく家老の家に生れ、文武の英才として名高いうへに、家中の若者のなかで際立つた美貌でも知られてゐる喜多村金吾の小さいときからの友である伴新八にとつて、いちばん馴染深いのが、この目と口辺に漂ふ悪戯つ子の表情だつた。

金吾は幼いころから才氣の煥発さと、字を巧みに書くことで知られた。七歳のとき兄とともに藩主信寿に呼ばれて、城中の歌舞伎見物の席に列なつた。観劇後の信寿の下問に機知を示して、神童と噂された。十歳のときに奥羽行脚中の俳人に接して俳諧を始めた。十一歳で斎藤安兵衛の

門に入り無辺流の槍術を習つた。いづれも上達が目ざましかつた。津輕の家中は、信寿が派手な人柄で遊興を好んだので、さほど影響が及んでゐなかつたのだが、江戸で將軍吉宗が、たびたびきびしい儉約令を發して、上下の奢侈を禁じ、みづから木綿の服を着て模範を示したのを知ると、金吾はわざわざ黒縮緬の普通よりずつと裾の長い羽織を誂へ、それを着て弘前の町を歩いた。色白の美貌に不敵な翳が加はつた。婦女子だけでなく、衆道を好む男子にも、恋ひ焦れる者が少なくなかつた。付文や密会の申込は日常のことに近かつた。それに応じたり、素気なく撥ねつけたりする規準が、はなはだ氣紛れに思はれて、焦れる者にはいつそう魅力を増した。家中の年寄や穩健さを重んずる者には、評判がよくなかつた。だれにでも對等に口をきき、率直にものを言ひ、その言辭にしばしば皮肉の針と冷笑の棘のふくまれてゐたことが、驕兒の印象を与へた。學問の師友と、弘前の城下から三里ほど離れた石川村の大仏ヶ鼻に遊んだときだつた。金吾は途中の道道、七言絶句の漢詩百首を立続けに作つてみせて、同行者を驚かせた。あとの得意氣な笑ひや言動に、おのれの才を人に誇示する倨傲の氣配を感じて、不快に思つた者があつたかもしれない。そのときも新八は、金吾の表情の裏に、惡戯のあとの照れ笑ひを読んでゐたのだつた。独得の笑ひが、いまはすつかり消えてゐた。

あの狼狽から、ちやうど一年ほど経つた晩冬であつた。二十歳といふ年齢よりも遙かに顔がやつれてゐた。眉のあひだに苦惱の皺を刻み、眼窩が落窪んで、不敵の翳はなく、不安の色が濃かつた。別人の變りやうだつた。金吾は新八の部屋にゐた。新八の家人に聞かれぬやうに声を押し殺し、驚愕で胸が潰れるほど重大な決意を打ち明けた。

——それ殿と夫婦になる約束をした。いふな。わかつてゐる。これはもはや決めたことだ。どのやうに説かれても、われらの心が變ることはない。

感情の起伏が激しく、氣分の變りやすい男であつた。この日は恐しく高ぶつてゐた。

——同道して国許から立ち退くつもりだ。ひそかに用意を調へたが、路用が足りぬ。おみに頼みがある。これを金に換へて貰ひたい。一生に一度の頼みだ。

書物などは自分で金に換へたのだが……と言つて、引き寄せた布の包を解いた。男の着物のほかに女の着物も出てきた。なるほどこれは、自分で売りに行つたら怪しまれるだらう。いかにも高価な着物を、金に換へる手立ては、新八にも思ひ当らなかつた。あるいは、これで金を用立ててくれと言つてゐるのであらうか。名門の家に生れ、學問においても武術においても、子供のころから思ふやうにならないことがなかつた金吾には、微祿の家に育つた新八と違つて、相手の都合や微妙な心の變に氣がつかないところがあつた。いちばん氣にかかつてゐたのは、そのことではなかつた。

それは、金吾の兄で喜多村家の当主久通の妻であつた。噂は前から薄薄あつた。

金吾が槍を習ひ始めたころ、父の政方が死んだ。七歳年長の兄が家督を継ぎ、家老森岡民部の妾腹の娘そねと婚約した。翌年に結婚して一年半目に、久通は御用を命じられて京に上り、帰途そのまま江戸詰を命じられた。

津輕家では、江戸にゐた世子の信興が急逝して、その子の信著が弱年で世子となり、ぢきに家督を継いでゐたので、學問の知識と温厚篤実な人柄を見込まれ、教育役の一人に選ばれたのだつ

た。久通は家に伝はる血とともに山鹿流の兵学を受け継いでゐた。また亡父政方と官撰の藩史『津軽一統志』の編纂に加はつて、津軽家代代の功臣や重臣の家系や家伝に詳しかつた。

久通が江戸詰となつた翌年、母と妹も江戸に出た。弘前の家には金吾と嫂のそれだけが残された。用人のほか仕へる家来や小者や女中が何人もゐる大きな家であるから、二人きりといふわけではない。だが家中きつての美少年で、恋ひ焦れる者が少なくない金吾と、結婚後いくらか経たないうちに夫の留守をまもる身となつた嫂とは、その孤閨の期間が長びくにつれ、口さがない世間の恰好の噂の種になつた。事あれかしと望む無責任な気持からであつた。羨望と嫉妬もまじつてゐた。事實はだれも知らなかつた。新八が冗談とからかひ半分の気持で聞いたとき、金吾は怒氣をふくんで言下に否定した。

二年にわたつた江戸詰を終へて、久通は帰国した。噂を耳に入れた者がゐた。久通は少しも動じなかつた。まつたく信じてゐない様子であつた。噂は立消えになつた。それからすでに四年経つ。金吾に突然の告白を聞かされて、新八は仰天した。少年時代の有名な事件であつた新屋吉兵衛のことを思ひ出した。江戸在勤中、小姓組頭の吉兵衛の妻が、家来と逃げた。吉兵衛は暇をいただいて女敵討に出た。ふた月のあひだ江戸中を探し回り、隠れ住んでゐた二人を見つけて討ち果した。その後、婦参はかなはなかつた。女敵討は名誉なことではなかつた。妻に駆落されたら、武士として女敵討をしないわけにはいかず、しても失はれた名誉は回復されないのだつた。参勤交代が隔年に行はれてゐるので、江戸の出来事は、間もなく弘前の噂になる。將軍吉宗の世になつてから、武家の綱紀と道義の肅正をはかる政治が進められてゐた。それでも武士の妻の不

義密通はあとをたたず、しきりに女敵討が起つたが、討ち果しても帰参がかなつた例はないと聞いた。

金吾とそねが出奔すれば、将来を嘱望されてゐる俊才の久通は、あとを追つて女敵討に出て、出なくても失脚する。最悪のときは、家門断絶といふ絶体絶命の窮地に陥ることになる。それを金吾にさせてはならなかつた。新八は語気を強くして翻意を求めた。かたくなに首を振つた。気の変わり易い男であるが、いつたん決意したことは死んでも曲げない性格であつた。ここはひとまづ預つて置いた方がよい、さう判断して、新八は着物の包を自分の手元に引いた。

——おみを大丈夫と信じての頼みだ。このことは決して、だれにも明かしてはならぬ。もしも約を違へたならば、殺すぞ。

血走つた目で言ひ置いて、金吾は去つた。

いくら思案しても、自分一人の胸で解決のつくことではなかつた。新八は共通の友人の毛内有右衛門と笹森三太兵衛に相談した。はじめのうちは舌打と溜息ばかりだつた。そのうち一人が金吾を責める言葉を口にした。堰を切つたやうに、おたがひ胸底に押し隠してゐた悪口と鬱憤が、いちいち具体的な例をともなつて流れ出した。高慢、無責任、自惚、傲岸、蔑視、冷笑、我儘、鈍感、不誠実、不忠、不孝、不義……。一人が喋り終るのを他が待ちきれぬ有様だつた。三人の言葉を寄せ集めると、喜多村金吾はこの世のありとあらゆる悪徳の象徴だつた。天人ともに許さざる大罪人の典型であつた。火桶の火は小さくなつて、すでに白い灰しか見えなかつた。二月初めの底冷えのする夜であつたが、これは一大事だぞ、と腕を組んで沈痛な面持をしてゐた三人

が、いまは上気して、有頂天に近くなつてゐた。一人が虫も殺さぬやうに見えたそれを非難した。これはそれへの悪口の羅列にはならず、卑猥な話に転じて、爆笑が生れた。たがひの女の経験談と失敗談が続いた。からかひと笑ひが合の手に入つた。あまりに爆笑が相次ぐので、何事かと思ひました、と新八の母が襖を明けて笑ひをふくんだ顔を覗かせたくらゐであつた。それに恐縮して見せた一人が、襖がしまつたあとで、ふと、友が生きるか死ぬかといふときに、こんなに笑ひ転げてゐてよいものか、といふ反省を口にした。にはかに寒気が身に迫つた。はじめの弾まぬ調子に戻つた。こんどは相手が喋り終るのを待つのではなく、だれかが喋り出すのを待つ相談が続けられたすゑ、寒気に急ぎ立てられて、おほよそ次のやうに決つた。大事が出来するまへに、このことを監物（久通）殿に伝へ、それ殿を離縁させる。金吾にも納得させて、それからしばらく間を置いて別別に出国すれば、表立つた咎めは避けられるのではないか。

——では、だれが、それを……。

新八の問ひに二人の顔は、おみだ、と言つてゐた。いくらこのほかには考へられぬ正しい解決策であるとはいつても、親友の重大な秘事を密告する役目を、引き受けたくはなかつた。

——まづ喜多村の用人の長内に、様子を聞いてみよう。監物殿に伝へるかどうかは、そのあとのことだ。

と、新八は言つた。

あくる日、自分の家に招いた喜多村家の用人長内嘉藤次にむかつて、新八は婉曲に、金吾とそねが家名にかかはる大事を引き起さうとしてゐるのではないか、と訊ねた。嘉藤次も自分一人の

思案に余る心配事を抱へてゐた様子だつた。じつは、と話し始めて途中から涙声になり、やがて涙がとまらなくなつた。先月、台所の一隅の羽目板の隙間に、金吾が書状らしきものを差し込んでゐるのが見えた。まへから氣にかかつてゐたことがあつたので、去つたあとに抜き取り、思ひ切つて開いてみた。読んでゐるうちに血の氣が引いた。目の前が暗くなる内容を記したそねへの手紙だつた。これが実行されれば、喜多村の家門断絶は必至であると思はれた。久通は城に出仕してゐて不在だつた。嘉藤次は意を決して、金吾の部屋に行つた。いまそこに落ちてをりまして、と手紙を出し、何気なく読んで動転したことを述べた。このやうなことはなにとぞ思ひとどまつて下され、と必死に諫言した。真赤になつた金吾の表情にあつたのは、恥辱の色だつた。その色がだんだんに引いて青い顔になつた。よし、わかつた、あきらめた、と簡単に言つた。わかつたから下がれ。さう言はれて部屋を出たのだが、しばらくして不吉な胸騒ぎがした。戻つてみると、金吾はいつの間にか白い着物にきかへて、短刀を手に切腹しようとしてゐた。お待ち下され。飛び込んだ嘉藤次は背中に回り、後から腋の下に入れた腕をかぎにして、短刀を持つた手を上にもぎとつた。放せ、放せ、となかば羽交締めにされた恰好で金吾は叫んだ。武士がこのやうな恥辱を受け、生きてはをられぬ。わかりました、わかりました、と短刀の手を締め上げてゐる腕の力は緩めずに嘉藤次は懸命に謝つた。手紙を読んだのは悪うございました、監物様はかだれにもきつと内密にいたします、読んだことも忘れます、手紙など目にしたこともございませぬ。束縛を振りほどかうとしてゐる手から短刀をもぎとると、金吾はおとなしくなつた。約束した以上、久通に語ることはできなかつた。忘れるとも約束したが、手紙の内容は頭から離れな

つた。嘉藤次は空恐しさに怯える毎日を通してゐた。

——その手紙には、どのやうなことが記してあつた。

と新八は聞いた。嘉藤次が覚えてゐた中身は、金吾が新八に断片的に語つたことと一致した。去年の夏の大病から体具合のよくないそねが、湯治の許しを久通に得て、大鰐へ行く。あとから金吾が家を抜け出し、大鰐の湯の宿へ行つて、そこから二人で出奔する、といふ心算なのであつた。

——いまいちど、命がけでお諫め申し上げようと思ひましたなれど、金吾様は一体なにをしかすかわからぬお方ゆゑ……。

嘉藤次は涙の涸れた口調で、去年の夏、そねが大病にかかつたのと同時に、金吾も憔悴して床から起き上がれなくなつたときのことを話題にした。ひとつ屋敷の中で、なにかの塩梅で二人だけが、ひどい食あたりでも起したかと思はれた。あれはじつは、二人で毒を飲んで、心中を図つたのに違ひなかつた。いまから考へれば、あるとき食あたりと思はれて儚くなつてゐたはうが、二人のためにも喜多村の家のためにもよかつた、とさへ嘉藤次は言つた。

新八は、出奔の路用の調達を依頼されて容易ならざる大事と思ひ、毛内、笹森の兩人と相談した結果、これを監物殿に伝へ、そね殿との離縁を勧めることに一決したと述べた。われらの考へを、監物殿に取り次ぐ役目を引き受けてはくれないか、と頼んだ。嘉藤次は承知した。

あくる日、新八は久通の使ひに呼ばれて、喜多村の屋敷へ行つた。裏切つた弟への憤怒やら憎悪やら、妻を奪はれた恥辱やら無念やらの混乱を、いかなる力によつて抑へつけ、断ち切つたの

か、久通の顔の色は意外に澄んでをり、事の成行だけを案ずる面持になつてゐた。金吾とそねはそれぞれの部屋に蟄居を命じてある、と言つて久通は訊ねた。嘉藤次がかやうに申してをつたが、それに相違ないか。相違ございませぬ、と新八は答へた。

——あの兩名が、過つた考へを改め、事を断念する望みは、ないか。

——嘉藤次が命がけで諫め、われも強く翻意を求めましたが、効がありませんでした。昔からひとつことに取り憑かれて、かうと思ひ込むと、ほかは一切目に入らなくなる氣性ゆゑ、考へを改めたり断念する望みは、まづ、ありますまい。強ひてそれを求めれば、おそらく死を選ぶかと……。

——さうか。ならば仕方がない。

久通はそねを呼ばせた。部屋に入つて来たそねは、どのやうなことになるかと覺悟を決めてゐる様子だつた。久通はそねに言ひ渡した。

——家風に合はぬゆゑ、離縁いたす。さにと參つてをれ。離縁状は追つて届けさせる。

言葉の調子からして、まだ離縁を確定させずに事を解決することに、いぢるの望みを残してゐると感じられた。そねが去つてから、久通は金吾に対するやうに新八に言つた。

——離縁いたしても、同道しての出奔は許さぬぞ。どうしても国を出たくば、金吾一人で參るがよい。

離縁後に二人を別別に出国させる、といふ自分たちの相談を嘉藤次に話したのが、伝はつてゐたのに違ひなかつた。

先のことはわからなかつたが、一段落した気分、新八は家に戻つた。しばらくして、喜多村の家の小者が駆けつけて来て、金吾様がお詫びに切腹すると騒いでをります、と告げた。騒いでをりますといふ言ひ方に、金吾を見る小者の気持が出てゐた。あやつ、どこまで世話を焼かせれば気が済むのだ。一瞬、憎悪に近い憤激を覚えながら、新八は小者と喜多村の家に向つて雪の道を行つた。走りながら、監物殿はいかがなされてをる、と聞いた。好きなやうにさせよ、と言つて外へ出て行つてしまはれました。

小者が先に立つて、玄関横の木戸から、庭に案内した。金吾は白い着物をきて、座敷の縁の下に雪上に端坐してゐた。武術鍛練のために雪掻のされてある場所であつた。横に嘉藤次が平伏して、諫止の言葉を續けてゐる様子だつた。短刀はすでに片づけられたとみえ、そばになかつた。本当に死ぬ気はない、と見た。新八は無造作に近づいて行つて、金吾の前にしやがみこんだ。その態度に油断があつた。やには新八の脇差を奪つた金吾は、抜いた刃を自分の首筋にあてようとした。飛びついた嘉藤次が、刀の手首を両手でつかんで制した。新八も協力して刀を取り上げた。死なせてくれ、われは死ぬ、死ぬのだ、と嘉藤次に抑へつけられながら、なほも刀に手を伸ばしてくる金吾の目は、正気の色ではなかつた。窪んだ眼窩が隈になつて、幽鬼の顔になつてゐた。新八はその耳元に口を寄せて低く叱咤した。それ殿をどうするつもりだ、それ殿を残して一人だけ死ぬつもりか。金吾の体から力が抜けた。新八は耳元に囁き続けた。まかせておけ、決して悪いやうにはせぬ、われらがきつと、それ殿と二人で津軽から出られるやうにしてやる。

いくらか落着いた金吾を、嘉藤次に預けて帰つた。まかせておけ、といったが、別によい思案

があるわけではなかつた。あの調子では、いつまた自害を図るか知れぬ。さう思ふと、初めは腹立たしい氣持で、死にたい者は勝手に死ね、と独り言ちてゐたが、少し時が経つにつれ、夜になると不安が募つた。新八は、それが預けられた森岡内蔵之助の屋敷へ行つた。内蔵之助はそねの父民部の嫡子で、新八が属してゐる御手廻組の組頭だつた。土間の方の入口からはひつて、奥方様に内密の話があると云つた。奥方とは顔見知りであつた。新八は、金吾が自害その他どのやうな騒ぎを起すかも知れず、さうなれば事が表沙汰になる恐れがあると説き、金吾の氣を静めるために、嘘でもよいからそね殿の文をいただきたい、と頼んだ。奥方はひそかにそねを呼んだ。そねはなにものかの化身を思はせる透き徹るやうな美しさになつてゐた。新八はいまの言葉をもういちど繰り返した。奥方の無言の許しを受け、そねは固い表情で、ごく短い文をしたためた。それを持つて、喜多村の屋敷に回つた。嘉藤次を呼んで様子を聞いた。新八の言葉を信じて、いまはおとなしく謹慎し、書見や詩作をしてゐるとのことだつた。これを護符に持たせてくれ、と新八はそねの手紙を渡した。

数日して、新八と毛内有右衛門、笹森三太兵衛が、朝早く喜多村の屋敷に呼び集められた。そねの文が金吾に渡つたことがわかつて、森岡内蔵之助は大いに立腹し、そねを一間に嚴重に監禁してしまつた、と久通は告げた。新八は俯いた。心の中で、金吾の命を案じてしたことだ、わればかりではない、随分多くの者が、あの男一人に振り回され、かうして心を痛めさせられてゐるのだ、と思ふと、金吾にたいする怒りと憎しみが、むらむらと込み上げてきた。

——内蔵之助殿は、もう決してそねを外に出すことはない、と申してをつた。かりに、おみた